

内 觀 論 (コ フ カ)

岩 井 勝 二 郎

クルト・コフカ氏は所謂新心理學の創設者として、吾人の近年注目する一人であるが、次に紹介せむとする内觀論は、ハンス・ファイヒンゲル氏

七十歳の誕辰を記念するために捧げられた冊子の一部分をなすものである。この特別の事情が、かくの如き題目について氏の思想を纏める機會を與へたものである。氏もいふやうに、内觀のことたる、元來、心理學の問題ではあるが、斯學の根底に關係するが故に、また一個の哲學上の問題ともなるのである。

近時、心理學は長足の進歩を遂げ、その方法に於ても、結果に於ても、到底、從來の内觀についての議論を維持する能はざる状態にある。この事

情を哲學關係者に語らうとするのが本論文の起草せられた主なる理由である。

一

いかなる科學に於ても、觀察によりて、その對象があるがまゝに把へやうとするのであるが、こゝに體驗知覺——コフカ氏は、從來、内觀とよばれしものを、特にかくいふ——は、心理學者の用ゐる觀察法である以上、それについて次の公準が立てられる。

體驗知覺は、心的所與を、實際あるがま

ゝに把へるものである。(命題第二)

しかるに、他方、觀察殊に分析的なる考察が、所與を變化するといはれ、從て又、

體驗知覺は、心的所興を變化するものである。(命題第二)

この矛盾を説明せむとするのが、氏の内觀論の要旨である。

二

命題第一の吟味から、はじめる。

一見、自明、無内容ともみられるこの命題は、その實、相當の意義、結果を伴ふのであつて、まづ、物。すなはち外部觀察に比して、一層高級の地位を占めるものとせられる。但し、物の觀察は心の被覆を通じて、はじめて可能であるが、心の觀察は、心が心を自ら、直知するからである。

次に、吾人の心的實在を構成するところの所興は、かくいふ體驗知覺によりてのみ、可能である。何人も體驗する。併し、體驗を觀察するものは、心理學者である。心理學の對象は、各人の體驗ではあるが、この體驗は、心理學的觀察によりて、はじ

めて、科學的に把握せられるのである。かゝる充分なる體驗知覺を遂げ得るものは、ひとり發達せる意識を有するものに限り、しかも、場合によりては、種々なる體驗を、多方面にわたり、反復、これを比較して、はじめて、各部分、各方面を發見し得るのである。例へば、憤怒は直接、觀察せられることはできぬ。從來の反省の助けを得てはじめて、その記述を全くし得るといはれる。日常見るところの色、室を氣持よくも、厭はしくもするその色、風光の中にある色、乃至は顔色をひきたせもし、殺しもする着物の色は、實驗場に於て、日光を分析して得たり。色獨樂を廻して得たり、更には、色彩八面體に位置づけられる色と同一であるといふ。かゝる前提あればこそ、はじめて、心理學は正しいものとなり、あるがまゝに活きたる心的なるものを研究することができるのである。

次に、體驗知覺は、現象——コフカ氏に於てこ

の語は、體驗現象の謂に用ゐられる。——についてのあらゆる質問に答へること、すなはち完全なる記述をその課題とする。

物は心の被覆を通じて觀察せられるに對し、體驗は直接に觀察せられるといひ、しかもこの觀察には、場合により、種々なる手段が講せられることを要するとすれば、更に又、命題第二の反對をなすところの命題を要する。

觀察することは觀察せられる所與を變化するものではない。(命題第三)

しからは、體驗現象を觀察するとは、如何なる意味であるか。

種々なる解答が與へられるのであるが、その極めて簡單なるものをあぐれば、體驗知覺に於ては現象は、あるがまゝに把捉せられるが(命題第一)

外部觀察では、同一の内容を、別の仕方ですなはち、物の見地の下に把捉するといふ。従て、意識内容は自らの性状を具するのではあるが、それは種々なる仕方ですなはち、又、全然、把捉せられないこともあり得るのである。但し、體驗知覺に於ける把捉は、上掲、第三の命題に本づくものであつて、意識内容は、それ自らの性状のまゝに把へられるのであるが、併し、一現象のあらゆる性質を一時に把捉することは不可能とせられ、そこに體驗知覺の一つの制限がある。

次に、把捉するとは、何の謂であるか。

「私はこの過程を把捉した。」といへば、通例は「一つの外的の事象に對して、それによりて、外的過程に對して、一つの適當なる反應をみつめるやうに一定の(内的)行動を執つた。」といふ意味である。この場合に、私の現象内に起つたこと換言すれば、私が把捉したときに、私の現象内に

生じた變化を記述するのが、心理學の課題である。こゝに把捉といふ語は、心理學上、純粹には、記述的概念ではなく、通俗の意味に於て、主客の關係を示すものである。今「私が一つの物的過程を把捉した。」といふことは心理學的にいへば「かくかくの現象を持つた。」といふことである。次に、「私は、私の意識内容を把捉した。」といへば、この場合の把捉は、「體驗知覺に於て把捉せらるべき現象 P_1 に、他の現象、しかも、表象 $V_1 V_2 V_3 \dots$ が配せられ、この表象經過 $V_1 V_2 V_3 \dots$ は、 P_1 の憶起像の反復、再生を生じ、この憶起像を特に鞏固にし、その再生を容易にする。」との謂である。従て、この考へによれば、體驗知覺は、觀察すべき現象の憶起像の再生の謂に外ならぬ。日常通例の行動の、體驗知覺行動と異なる點は、たゞ、表象系列 $V_1 V_2 V_3 \dots$ が P_1 よりはなれて、すなはち再び P_1 の憶起像にみちびかぬことである。かくて、(一)體驗觀察で把捉

せられる現象と、通例の現象とは、同一である(命題第三)とせられ、又(二)意識の經過は、一系列の互に獨立なる斷片、すなはち要素に分解せられることを主張するものである。若し、個々の斷片が互に影響し合ふものとすれば、命題第一によりて前提せられる第三の命題はあてはまらぬ筈である。こゝに(二)の結果は體驗知覺的分析的性質に關する命題として、第四命題とよぶ。

意識の經過は、互に獨立なる要素にわかれたる。(命題第四)

知覺せられたる現象を、知覺せられざる現象より區別する特徴としては又、現象そのものに内在する性質、明度を以てする試みがある。觀察せられた現象は明瞭であり、注意の焦點を占めるが、觀察せられざる現象は、不明瞭にして、内的視野の周邊に位するといふ。従て、現象に氣付くとき

は、不明瞭といふ性質を有したる現象が明瞭の性質をもつ現象によりて置き換へられるのである。

これ、一見、第二命題に相當するものであつて、命題第三とは矛盾するかの觀があるが、暗黙の裡に、この場合の變化は、たゞ、明度の上にとり、その他一切の標徴には及ばぬことを前提するのである。例を判じ繪に採れば、その繪にかくされたる猫の姿は、現象としては、發見せらるゝ前後を通じて、不變であり、發見せられざる際にはたゞ不明瞭であるにすぎぬとする。すなはち、體驗知覺に於ては、ひとり、觀察せられる現象に止らず、觀察せられざる現象亦把握せられ得るとなすことによりて、辛じて命題第三を救ひ得たのである。

觀察することによりて、變化を受ける現象も存在することは、全ての心理學者の承認するところである。自らの憤怒を壊すことなしに、これを注

意することは出來ぬ。これに對して命題第三を救ふ途は二つある。その第一は、直接觀察に換ふるに、回想的體驗知覺を以てすることであり、第二は加之、なほかゝる非難の當らざる多數の、直接記述の許さるゝ現象の存在を主張することである。

このことは、所謂強制的なる意識狀態、すなはち體驗知覺の意圖の下にあらはるゝものについていはれるのであるが、かゝる意圖の現象の上に及ぼす影響は、主として、その経過、すなはち、個々の要素の繼起の上にあらはれる。蓋し、一要素を觀察するために、それにつゞく過程は妨げられ、又は除かるゝに至り、よりて、その時間的持續の上にも變化を來すのであるが、更に明度の上の推移をも生ずる。かくて、觀察の意圖は、全経過に對して、その自然性を損ひ、経過を變へるのであるが、特に引き離れた體驗を取扱ふか、又は、複雑なる全體的過程の最後の項を取扱ふ場合には、

かゝる心配も、大體はなくなるのである。

三

次に、かくいふ説の經驗的の根據を吟味しやう
回想的體驗知覺は、たゞ主觀的の確證と、客觀的
證明とに基づけるものであるが、そののみが單獨
に行はれる場合には、直接に確めることはできぬ。

この點では、直接的體驗知覺が幾分都合がよい。
色、形、音、匂、味は、その知覺的の所與に於て
注意せられもし、把握せられもする。故に、記述
と記述せられるところのものが一致することも
何等疑ひないと思はれる。併し、かくの如きは、
極めて少い例であり、従て、以是、體驗知覺の問
題を解きつくしたと見ることは不可能である。實
際、この種の經驗的根據に立ち論者は、隱約の間
に「記述と記述せられるものとの一致關係は、それ
が存在する間に把握せられ得る全ての所與に對し
てあてはまる。」と信ずるものである。この前提

は、第三命題を含むものであるが、體驗知覺により
て、日常生活に於ける自然の所與を寫さむとする
場合にも、また、なされる筈である。併し、決して
自明の眞理ではなく、且證明のできぬのである。

かれ等の主張するところは、私がいま見て、記
述するところの青色は、壁掛けの青色をみて満足
したときのその青色と、全く同一の所與であると
いふのである。併し、そこには著しい相違がある。
すなはち、一方は、かく／＼の形をもち、かゝや
きをもつ部室の青色の壁掛けであり、他方は、孤立
し、分離せられたる青色である。この部室に屬す
ることも、壁掛けの青色であることも、その本質
をなさぬのである。單に青あるのみである。但し
かくいへば、或は双方に於て、青は青として同一
であると抗辯するものもあるであらうが、それは
比較に基くものである。すなはち、二つの青をそ
の中を含む一つの所與に基き、従てそのいづれと

も異なる第三の、新なる所與に基くものである。かゝる比較の體驗よりして、原經驗を推及せむとすれば、更に別の前提を必要とするにいたる。而して、この第二の前提とはすなはち、「同一名稱で示される所與又は部分的所與は——又、心理學的にみて——全然、相等しく、同一の所與であり、その複合は、その性状を變化せぬ。」といふのであつて、又、證明を俟ちて、はじめて用ゐられる筈のものである。

さて、上掲の説は第三命題に基くのであるが、この命題の經驗的根據については、^{II}ラアン氏や^{III}エラア氏の論文を指示するに止める。要は、それ等の議論は、實際、嚴密ではなく、別途の解釋も亦可能なのである。かくて、この命題は、一つの前提であり、一つの公準であるに過ぎない。併し從來の第一命題に基く心理學説は、皆、又、第三命題

を用いたのであつて、實際、第一命題は、科學の必須の前提であるかの如き觀を呈するのである。

四

次に、第二命題の吟味に移る。

命題第三の信奉者といへ共、殊に強度に關係する場合には、例外を許し、觀察が現象をかへることを認める。併しながら、一般に原理に例外を許すことは危険である。

こゝに或る學者は、第二命題を代表して、體驗知覺に於ける諸態度、諸種の反省は、分析的にはたらきて、現實に於て統一的に相關聯するものを分解し、ために、本質的なる變化を惹起するものであるといふ。

暫く、この種の主張の根底をなす事實について考へやう。刺戟は不變でありながら、注意や態度の變化につれて、現象に著しき變化を來し、しかも到底、單に、明度の相違のみでは説明せられざる

例は多い。心理學上の實驗に於て、注意の向け方によりては、同一刺戟配置に對して一定の視野を動く一つの物をみる場合もあれば、各々がたゞこの視野の一部分だけを動く二つの物をみるやうにもつぐられ、更には、注視點の位置によりて、運動を種々なる方向にみることもできるのである。更に、一つの樂音が、分析的觀察によりて蒙る變化は單に明度の差違のみに盡きないのである。その例は、又、ネツケル氏の髯子や、シュレエデル氏の階段の如き可逆的錯視にもあるが、ルビン氏の簡單なる二次元的の多義圖形について例示すれば或は黒地に於ける白十字架ともみられ、或は白地に於ける黒十字架ともみられる圖形があり、又、白地に太き輪廓を持つ黒色の高脚盆とみられしものが、忽然、全く一樣なる黒地に相對する二人の白い横顔となる圖形がある。この種の實例は、又西洋將碁盤に於ても、みられ得るところである。

これ等の實例にありて、第一の現象より、第二の現象に移る場合の移行は、決して第三命題に従ふものでないことは、ルビン氏が明截に記述したところであるが、第二現象に於て、形としてみられるところのものは、第一現象では、明度が小であるのではなく、全然、存在しない。換言すれば、地と形との區別は、明度の區別ではない。注意を地に向けて、地が形として明瞭になるのではなく現象に本質的なる性質上の差違が生ずるのである。

かゝる差違は現象の方面に於て最も根本的のものであることは、實驗的研究によりて益々明かになつたのであるが、更に、それに對應して機能的の差違の存することも知られたのである。かやうに、觀察することが現象を變化するのであるが、この際、觀察せられるものは形となり易く、觀察せられざる部分は、地となり、從て、現象上に著しき差違を生ずるのである。

いま、で、注意すると否との差違をば、一つの簡單なる系列の兩極と解したが、もはやかゝる見方は捨てられねばならぬ。同一の物、同一過程も性質の上で、太しく異なりてみられ得るものである。橋はこれを一の風景に對して適するか否かともみることが出來、又、これを、その構造の良否について見ることもできる。かくて外物の同一から

して、直ちに、又、その現象の同一に推及するのは早計たるを免れぬ。現に、實驗によりても、注意の有無に止らず、注意の仕方の種類によりて現象の變はることを知ることが出来る。例へば、ミユラアー、ライエル氏や、ツヨルネル氏の錯覺に於てもみられるやうに、全體を全體としてみると、部分に注意するのでは、現象の上に差違がある。

かくて、命題第二は、その經驗上の支持を得たのであるが、一般に、記述は、つねに、或る注意の仕方を前提し、この注意は、更に記述の目的に

依りて定められるものである。例へば、暗誦せられた無意味の綴りの表象について韻律性を記述せむとする場合と、この表象の判明度、色、大きさを問題とする場合とでは注意の仕方が同一でない。最も極端なる例は、同一對象に對して物理學的及び心理學的觀察を遂げる場合の差違である。

かくて、いかなる心理學的の記述も、一般の記述と同様に、既に一種の態度を前提するものである。しかも、この態度は日常生活のものとは別であるから、當然、その記述は、日常生活とは別の新なる現象となり、従て、著しき變化を蒙るものである。

五

心理學の可能なるがためには、第三命題が公準とせらるるにも拘らず、吾人は體驗知覺を第二命題に基礎づけたのであるが、この矛盾の解決につい

ては、又、種々なる試みが行はれた。

ナトルプ氏は、心理學の課題を記述とする代りに、その再建にありとした。併しその再建の材料として用ゐるところのものは、^{IV}キヤムプベル氏の考と似て、命題第二に基きながらも尙且記述を正當づけむとするものである。キヤムプベル氏の語をかれば、「いかにも、具體的なる心的實在は、内觀及び分解のために變化せられるが、この變化は、科學的には除却せられることができる。すなはち反復的、比較的の觀察と、公平なる事實に即する分解とに由る。」のである。

併し、かゝる解決は、當を得たものではない。又、キヤムプベル氏は、所與に於て、「氣付かれざる要素」をみとめるものであり、このことは、第三命題をつくりたる學者の武器であつたのである。

六

いまや、經驗的に支持せられるものは命題第二

のみであり、しかも心理學の成立には、第一、從て第三を要する。こゝにコフカ氏は第二命題に立ちて、體驗知覺を説かうとする。果して、それは第一命題と調節し得るであらうか。第二命題を、以下に於ては、次の形式で用ゐる。

心理學者として記述するところの現象は、日常生活に於ける現象ではない。心理學的の記述を得むがために、この現象を變へ、別種の現象を用ゐる。——

(命題第五)

於是、かく代用せられたる實在が、原の實在といかなる關係にあるか、問題となる。

心理學に於て用ゐらるべき概念は、單に、記述のみによりては、確實に立てられ得ぬ。記述的事實の外に機能的事實をも加へて、はじめて完成

するのである。所謂ウエルツブルグ學派の人々によりてつくられた識態、思想等の非直觀的現象は心理學者の一般に承認するところとなり得なかつたのも亦、機能的事實の保障を缺くためであつた。實際の現象は、かゝる非直觀性の概念を用ゐて、はじめ、記述せられるといふその主張は、全く拒まれ、却りて、實存する現象を正當に捉ふるには、觀察の條件が、不都合なりとせられ、且、非直觀性の現象とよばるゝものは、かゝる不都合の條件の下に得られ、又は得らるべき現象の總名にすぎすとせられた。この派の人々のこの概念にて意味したるところは、全く神祕的の表象であつて直ちに又、消滅するのやむなきにいたつたのである。その理由は、簡單であつて、これ等の概念は特定の一般的原理を前提するものであるが、ウエルツブルグ學派の人々はその不當なることを、嚴密に證明し得なかつたのである。しかるに、聯想

心理學けあらゆる機能的の事實をば、舊來の原理のたすけによりて、遺漏なく説明せむことを期し、この説明法に矛盾する一切の概念を排斥したのであつた。

心理學上、原色の存否についての爭論は、古典的なる事例に屬するが、これについても、單なる記述的の見地のみよりしては、決定することはできなかつたのである。或る學者は四原色の存在を記述的に絶對的に確實なるものなりと主張し、他の學者は、全然原色の概念を拒み、又他の學者はたゞく三原色のみを許す。こゝに四原色をみとむるヘリング氏の學説は、爾來きはめて有效なりしたため、原色はあらゆる非難に耐へて、その地位を保つたのであつた。すなはち、原色の概念の當否は全くヘリング説の當否に依存するかもみられた。併し、最近にいたりて、ケエリア氏の動物實驗の結果は、機能的に、原色の事實を證明し、

て漸くこれによりて原色の概念はヘリング説より獨立することが出來たのである。

かくして、第五命題によりて、「心理學上、日常生活に於ける現象に代用する現象は、有效なる心理學的概念にみちびく現象である。」といふことができる。すなはち、良好なる記述の標準は、その有効性に存する。従て、何等新なる問題を促すことなく、又、一般に證明を得ざるべき記述は、いかに詳細を極むとも科學的價値を有せぬのである。

代用現象の第三例としては、純音の本質的性質としての母音性の發見をあげることができる。

純音に母音性があるといふことは、純音を聞けば、何人もつねに、母音性をきくといふ意味ではない。一つの純音に注意して、なるべく、通常の

注意の仕方、すなはち音の高低に氣を付けることを避けるときは、母音性をもつといふのである。

而して、純音の母音性といふ概念の特徴、従て、新しい所興、すなはち母音性をもつ純音の産出は偉大なる結果を生じ、以來、説明し得なかつた事實の解釋にみちびくのである。刺戟としての純音が、吾人の側に於ける反應として母音性を結果しかくして、同一の母音性は、その純音が一つの音結合に於て比較的強いときにのみ聞かれることや、言語の理解と、音樂的稟賦とは、必しも一致しない理由も、説明せられ得るのである。

母音性の概念が心理學的體系中に入るこの後れたのは、音の高低の概念が心理學上の考へを支配したためであるが、この概念は、本來、單なる心理學的記述より來たものではなく、むしろ、音樂より、しかも、高低と振動數との間の、機能的に、極めて簡單なる關係より來たのであつた。

しかも、かゝる關係が、たゞ、振動數の限られたる範圍のみにあてはまり、それ以外に及ばぬことが發見せられたことは、この概念の全體的の位置に對して重大なる意義をなしたのであつた。

七

コフカ氏は、次に上掲、第五命題に於ける考へ方を、一層、一般化して感覺概念の起源にまで溯つた。

心理學的とよばれる全ての世界觀、從て、心理學的世界は、科學的たらむとし、又、科學的たるべかりし世界説明が矛盾に逢着した際に生じたものと考へられる。今日、感官的錯覺とよばれる事實は、本來は、全く別種の所與であり、生死、有心無心、變化、不變化等の區別なき世界に屬してゐたのであるが、ある程度まで、不變をその性質とする物が生ずるにつれて、この有效なる説明原理に適せぬ觀察は、新に、これを處理する必要を

生じた。かくて、固定的なる物に對して變化的なる感覺が生まれ、これによりて、物の原理の有効性が確保せられるにいたり、新たに有效なる實在、感覺が生じたのであつた。若し科學的の注意を固定的なるものより轉じて、動搖的なるものに向ければ、命題第二によりて、世界は別様の觀を呈し、從來、存在せざりし所與が生れ、かくて感覺が心理學者により、心理學者に對してあらはれたのである。

一旦、感覺が存すれば、世界をば、物の相に於て分解せると同様に、又、感覺の相に於ても分解することができぬ。

感覺と物との分離が行はれると、次第に、感覺に與るに、本來、物に與へた性質を以てするにいたり、殊に感覺の科學すなはち心理學がはじまれば、物の科學に於て有效である性質を感覺にも與へるにいつた。かくして、動搖的特性は漸次に

尖せて、むしろ、現象の流れの中より、固定的な、感覺要素を抽出することを課題とするにいたつた。而して、この感覺が刺戟と確固不變の關係を保つとする所謂不變假定は、なかく心理學に固着したのである。この假定は、又、第三命題と密接に關係する。蓋し、注意することが現象をかへぬとすれば、刺戟のみが現象を規定することとなる。こゝにも、心理學上の第一命題は、物の世界より採られたのであり、又それが心理學的の見地及び必要に逼られて立てられたのではないといふ假定の正當なるべきをみるのである。

かくて、又、感覺概念の限定が生ずる。この限界を超えて用ゐらるれば、心理學上にも、哲學上にも害を來す。實に感覺は、時の經るに従ひ、研究の一定の方向に従て、益々定まれる特性を得るにいたつた原本的の現象に對する第一次的の代用現象であるから、これを以て、究極的なる代用現

象なりとして、第一命題に従ひ、自然的なる現象を、あるがまゝに把握せむとするのは、謬りである。かくの如き假定は、實際的研究が、なほ命題第三を承認するかぎり於てのみ、可能である。併し、第二命題の導入と共に、感覺の概念はキヤムプベル氏もいふやうに擬設となり了るのである。

故に、心理學研究の途は、感覺に補ふに他の要素を以てするにあるのではなく、むしろ、感覺の代りに、他の要素、新に生ずる課題に一層適切なるべき他の原理を以てするにある。換言すれば、いまや感覺は、極端に、分析的なる態度を以て、現象にのぞむときに生ずべき現象となり了したのであるから、かゝる態度及びそれに伴ひて、命題第四を捨て、他の態度にいづべきである。

感覺について残さるべきものは、本來、物と感覺との分離の際に用ゐられたりしものゝみであつて、感覺の代りにおかるべき、あらゆる代用現象は、吾人が又、體驗、ともよぶことによりて特徴づけられる性質を持つことを要する。しかるに、この體驗は全く、心理學者によりて、心理學者のためにつくられたる代用現象であり、これ、やがて、コフカ氏が、自己知覺、とよばずして、特に、體驗知覺、とよぶことを正當にする所以である。

このことに關聯して、はじめに示唆したる體驗を以て、それより、人類が物の世界を構成したる本原的のものとのみ見る見解は、捨てらるべきを知る。

次に、コフカ氏は、氏の第五命題に於て言明するところを、物理學についても説明した。この場合にも、科學の課題とするところは、日常みらる

ゝ實在のそのまゝの記述にあらすして、新なる實在を創造する點にある。そして工學は、すべて純粹に物理學的なる知識を、實生活上の實在にうつすのである。物理學上の法則がたゞ實驗場に於ける物理學上の装置のみにあてはまるに止るならば、物理學は遊戯であつて、科學ではない。

八

上來、第五命題に基いて、心理學のなすところをみたのであるが、果してそれは第一命題と調和し得るのであらうか。

代用現象と、原の現象とを比べて、前者が後者に比して、學説上、一層有效であることを知つたのであるが、この標準は、いづこに存するのであらうか。

いま、で、良き記述概念を、その有効性、その説明上の價值によりて特徴づけたのであつたが、

多くの場合には、尙又、直接に、記述の良否を評價し得ることもある。

かくて、この體驗知覺説は、一般に記述に關する問題、並に、認識論の根本問題とも密接に關係して來るのであるが、こゝでは、たい、これまでの認識論は、多くは感覺概念の基礎に立つてゐたために、感覺概念を捨つることにつれて、本質的の變化を蒙るであらうことを注意するに止める。

さて、兩個の記述が同一對象についてなされる、正しき叙述より成りながらも、その記述に優劣の存するのは、何によるのであるか。

爆發モートルを知らざるものが、はじめてこれを見たるときは、記述も不可能ではあるが、後に技師のそれについてなす優れたる記述をきき、再びこのモートルを見れば、別個の觀を呈し、いまや、自ら記述することも可能となる。かゝる變化は、モートルの機能を説明したる概念を用ゐての記述

によりて生ずるのである。かくて、圓き部分、角ばつたる部分の代りに、汽笛、ピストンをみるにいたる。在來、機能的證明が、良き記述の標準をなしたのであつたが、いまや、對象のはたらきに適切なる概念によりて、一層よく、これを記述し得るのである。こゝに、又、第一の議論の意味に於ける有效なる記述は、こゝの意味に於ける良き記述と、尠くとも、よく類似してゐると考へられるのである。

しからば、モートルについての現象が、説明を聞く前後に於いて相違するのは、何によりて起るのであるか。以前には板や桿の錯綜したる一團を見、いまや、恰好に區分せられたる形象を見る。判じ繪に於て、後には猫を見、以前には、これを見ざりし區別に想到するのである。すなはち、一現象に代るに、一層良き他の現象を以てしたのである。こゝに一層良きとは、その對象に一層適切

なるの謂である。その場合の標準となるものは、私の記述能力である。現象の良好となるに従て、記述も亦、一層良好となることができる。

かくて、一物に屬する多數の現象中には、價値の區別が存し、同一物に對しても、自ら、現象に優劣があるのである。一つの物について良き現象を持つことを名けて、又、その物を把握した——わかつた——といふ。而して、かゝる把握には、屢々苦辛を要する場合もあることはすでに述べた。

堪能なる畫工も、腦髓を描くにあたりては、解剖學者に及ばぬのは、單に記憶の因子を以て説明すべき事柄ではない。既往經驗の有無、多少が、これに影響し、現存する感覺に、加算的に表象因子が添ふためにあらずして、現前の知覺現象中に於ける著しい變化があるのである。

尙、一言すべきことは、ルビン氏の圖形に於ても、判じ繪に於ても、一般に、良い現象は、形態

化せられたる現象であり、これと區別せらるべきものには、單なる加算的結合と混沌とがある。劣りたる現象は、優れたる現象より、兩方向の一方又は双方に外れる。わかるといふことは、形態化することであり、形態化することは、一方ではあらゆる錯綜が失はるゝこと、他方では、いかなる二片も、無關係に並列せざるの謂である。

かくて、何故に形態化せる現象が、形態化せざるものに比して、一層よく記述し得らるゝかを理解するのである。第一の場合では、形態よりして現象の秩序を、すなはち、各斷片に許さるべき重みを知るべく、たゞ／＼加算的なる結合に於ては、記述は純粹なる列擧に止り、錯綜にいたりては、一般に記述することはできぬのである。

九

かやうに、既に、外物の記述について承認した事柄が現象にも適用せられるであらうか。現象の

現象を持つことはできないではないか。

併し、現象に優劣のあることは、既に、これを示したが、この優劣はいまゝでは、外物に關係して定義せられたのであつた。この關係を除いて、二つのモートルの現象をみたとする。而して、第一は第二に比べて、一層混沌的であり、一層、加算的結合を呈し、第二は、著しく形態化する。かゝる區別は尠くとも、外物には關係してゐない。故に、心理學者によりて、わかるといふことは、形態化に置しき現象を、形態化に富む現象によりて代用するの謂である。併し、既に、示したやうに、吾人が現象に與へたこの變化は、現象にとりて無縁ではないのである。すなはち、形態化に富むとは、萌芽としてその中に潜みたるものを發展せしめることであり、従て、その本性に逆ふものではない。再び母音性について考るに、純音を聞くものは、みな母音性をも聞くといふのは謬りで

あるが、一旦、この性質を知れば、『いまゝで、聞いたことはないが、以來、聞いたものは、高低及び明暗では充分に記述せられなかつた。なほ他に何か存存したので、それは、いま氣付いたやうに、全く、この母音性の方向にそふものであつた。』といふであらう。

いまや、命題第五は、補充せられ得るのである。すなはち、

心理學的記述を得むために、本來的なる現象に代はる現象は、一層よく形態化せる現象である。(命題第六)

命題第二は、分析的考察による變化に關係し、命題第四を前提し、全體を一層良く形態化せずして、反對に斷片にわかつ變化に關係したのである。故に全體の見地に立てば、一層劣れる形態となつ

たのである。但し、分析すること亦、廣義に於ては一種の形態過程であり、感覺は、形態過程に先行するものにあらずして、特殊形態の最高産物となるのである。併し、分析は、最高の形態原理でない。この點については、近年の研究、殊に精神病理學によりて明かにせられ、腦の障礙のために感覺は失せても、一層良き形態の存する例がある。

次に、吾人が現象に於てなすところの變化は、實際、形態化であるのであらうか。これを體驗知覺によりて證明することができるであらうか。變形を以て、形態化と誤認し、又は誤りて、形態化する等のことはないのであらうか。

いまや、現象の優劣についての記述的の差違を知り、先には、機能的有効性の大小を得た。有効性を標準とすれば、單なる體驗知覺を確かめ、誤謬の危険を避けることができる。事實、しばく

この誤謬に陥り、漸次に、機能的研究により、これに氣付き、これを改めることもある。かくして代用現象を原の現象よりわかすべき、これら兩規定は結合せられ、有効性は、つひに形態化と一致することを知るのである。

一〇

命題第一の體驗知覺に於て、現象があるがまゝに把握せられるを要求する。しかも、この命題は、物の世界より來たものであつた。それが觀察によりて變化せず、吾人と獨立に存するといふのは、物の本質であるが、現象にはあてはまらぬ。従て第一命題は、別の意味に解釋せられねばならぬ。命題第五、第六によれば、現象は、體驗知覺によりて變へられる。併し、この變化は決して任意のものではなく、現象の本質に、その基礎を有する。故に、あるがまゝに、現象を見ずして、現象そのもの、理想に近くやうに變化するのである。

しからば、いかにして、この變化は行はれるのであるか。新なる形態化に於て常に、究極的の現象が得られるとは限らず、むしろ、多くの場合に於て、たゞこの完全なる形態の方向に近かしめるに止るのである。この優れたる現象を得ることは容易にあらず、特殊なる心理學的天稟の差違に本き、心理學者にとりて、最も困難なる課題をなすであらう。心理學者の心中に、現象に促されて、新なる形態が生ずれば、これを實現せむとし、そこに達すれば、原本的なる現象をば、それが理想的現象よりはなれる方向及び距離を知ることによりて、一層よく規定することができ、又、よりて命題第一の要求に近づくことができる。

更に、物と體驗知覺との差違について考るに、物にありては、質問が、その物に對して有意味であるかぎり、いかなる多くの質問にも答へ得らる

べきであるが、現象は一定の態度の下に生ずるものであつて、この態度によりて規定せられる性質を有するにすぎぬ。それ以外の質問は、無意味であり、進みては、この質問のために態度の變化を生じ、錯誤を招致するにいたる。事情によりては解答不可能の質問もあり、その答へられざるは被験者が、この性質に注意せざりしためではなく、現象は、當面の事情の下では、この方向へは規定せられざりしに由るのである。かくの如きことは物には不可能のことである。かくの如き場合に、解答を強れば、答へむがために強いて新なる現象をつくるにいたる。しかも、これは潜在せる萌芽の發展ではなく、錯りてその現象が他のものに變じたのである。かくて、現象についての所謂完全なる記述は、拒まれるのである。

一一

上に、有効性と形態化との間に關係づけ、前者

は後者の吟味の手段であるとした。而して、形態化せられたる現象は記述せられることを知り、記述より、延いて機能的吟味をみちびくことを知つた。併し、いかにしてこの吟味が實證的に行はれるのか。又、有効性が、主觀的に、吾人の問題に對してあらはれるのみならず、客觀的にも、新に發見せられる事實中にあらはれるにいたるのは、何によるか。

かくの如き、體驗知覺に對するのみならず、認識論の根本問題にも屬すべき問題を呈出したが、その解決を與へずして、コフカ氏はかれの内觀論を結んだのである。

(註)

- I Koffka, K. Zur Theorie der Erlebnis-Wahrnehmung. *Annalen der Philosophie* III/3 1922.
- II Kahn, C. The Relation of Sensation to other Categories in Contemporary Psychology. A Study in the psychology of Thinking. *The Psych. Monograph*. 16

- III 1913.
Köhler, W. über unbemerkte Empfindungen & Urteilsentscheidungen. *z. f. ps.* 66, 1913.
- IV Campbell, G. W. Frictions in der Lehre von den Empfindungen. Eine Studie aus dem Problembereich der „Philosophie des Als ob.“ Berlin, 1915.